

都市空間と黒人文化資本-ジョゼフィーヌ・ベーカーをめぐる

Urban Space and Cultural Capital of Negro Art – about Josephine Baker

立花英裕 (早稲田大学名誉教授)

世界初の黒人スーパースター、ジョゼフィーヌ・ベーカーを取り上げる。黒人芸術を広く認知させ、黒人の文化資本を飛躍的に増大させた人である。1925年、パリのシャンゼリゼ劇場の芸術監督アンドレ・ダヴァンと演出家ジャック・シャルルは、アメリカ合衆国から渡ってきた「チャールストン・ベイビーズ」の中から特に彼女を抜擢、「未開の踊り la danse sauvage」と名付けたダンスを踊らせる。観衆は熱狂し、チャールストンの爆発的なブームを世界中に引き起こす。ピカソ、ジャン・コクトー、ヘミングウェイらも絶賛する。大きな枠組みとしては、ジョゼフィーヌ・ベーカーを黒人運動の広い文脈の中で捉え、その身体の動きの中に黒人芸術の特質、その原点を探る。彼女のダンスは「身体の叫び」と言えるだろう。この叫びはどこから来るのだろうか。そこから20世紀初頭の黒人の立場を考える。ハーレム・ルネサンスの詩人ラングストン・ヒューズやアルジェリア独立運動に肩入れしたフランツ・ファノンを参照。また、ジョゼフィーヌ・ベーカーのポスターを作製して大家となったポール・コラン、彼女の舞台から発想を得たベルギー人の版画家フランス・マシリエルの作品も参照する。もう一つの視点として、都市文化としての黒人芸術を考察する。ジョゼフィーヌ・ベーカーのダンスはまさに都会的な性格を二つの面からもっている。一つは、彼女のダンスが興行的に成功するには大都会を必要としていたこと。もう一つは、近代都市の貧民街に誕生した文化・芸術としての側面。彼女は、アメリカ合衆国のセントルイスに生まれ、幼い頃から路上でダンスを踊っていた。そこから、彼女の芸術が醸成され、意識化され、もう一つのモデルニテ、貧民街を土壌としたモデルニテが生まれたと言える。最後に残された時間で、黒人差別、あるいは黒人の地位向上を文化資本の見地からどう捉えられるかを考える。